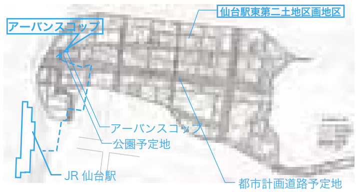
# せんだいアーバンスコップ・プロジェクト

## ―都市の市街地に点在する空地を利用した「まちなか農園」―

脇坂圭一・東北大学大学院工学研究科都市・建築デザイン学講座博士課程後期(協力者:細田洋子・仙台都市総合研究機構)

「クワを持ってまちへ出よう」。そういう視点で都市を眺めてみる。すると都市のなかにはこんなにも小さな空地があちこちに残されている。本プロジェクトはそれらの空地を「まちなか農園」として活用するものである。なぜ、農園か。仙台の代名詞ともなっている「杜」が、生活に密着したものから幻想的イメージへと変貌してしまった危機感によるものである。これは新しい「杜の都」の創造なのだ。仙台駅至近で繰り広げられた「せんだいアーバンスコップ・プロジェクト」は都市生活者を緩やかに結びつける都市のプラットフォームとしての可能性を示した。

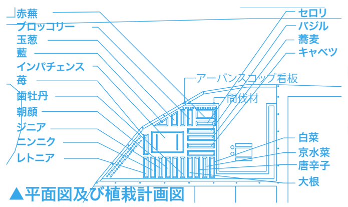


△アーバンスコップ周辺将来計画図

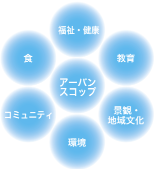
アーバンスコップは JR 仙台駅に隣接した土地区画整理地内の空地を利用した「農」空間である。アーバンスコップ周辺は藩政時代の街道筋であったことから、賑わいのある地域であった。しかし、区画整理事業により建物移転後の空地が目立つ一方、マンション建設が活況を呈する奇妙な風景が広がる。将来的に、小さな商店が並んでいた通りは 40m 道路に拡幅されることになっている。

| 位置 | 面積 | 土地所有者 | 駅からの距離 |
|---|---|---|---|
| 宮城野区元寺小路 | 200m2(畑 100m2) | 仙台市 | 400m(徒歩 5 分) |

▲アーバンスコップの概要



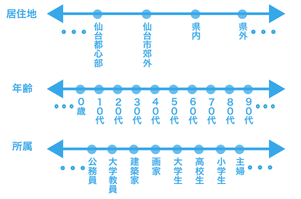
▲平面図及び植栽計画図



▲アーバンスコップ概念図

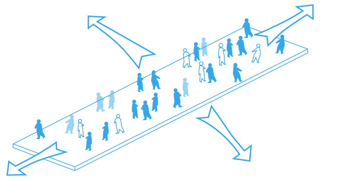
| 行為の主体 | 行われた行為 |
|---|---|
| 地域住民 | 野菜の成長を見にアーバンスコップにやってきて、訪れる人と会話をするようになった。その結果、腰痛の症状が和らぎ、元気になったといわれるようになった。 |
| 農業高校生 | 授業の合間に木枠の取り付けや野菜の定植指導を行い、住民から励ましの言葉をもらい、学校で学んだ農業技術を社会の中でどのように生きるかを知った。 |
| 子供 | 藍の木葉染めで、最初は緑色の液体だったものが染め上がるときれいな水色になることを体験した。 |
| 子供 | ワークショップで野菜や果物の断面のスケッチを行い、普段はあまり気にしない詳細まで見つめることで、食物の持つ不思議さ、多様さを知った。 |
| 地域住民他 | スライド上映会で、都心部の夜景や発光ダイオードのイルミネーションを背景に、通りすぎる車のライトとも相まって幻想的な雰囲気を体感した。 |
| 報道機関 | 立地の意外性から新聞やテレビ、雑誌からの取材を受け、その為さらに関心を持つ人が増えた。 |
| 地域住民 | 水やり、草取りなどの日々の世話を買って出てくれた。 |
| 地域住民 | 以前この地で野菜を作っていた要介護高齢者は、野菜を眺めるのが日課となった。あまり言葉を発しない生活になっているが、「ど根性大根」を気にかけ、「大根は？」と聞いて周囲を驚かせた。 |

▲アーバンスコップをきっかけとして生まれた行為



▲アーバンスコップにおける主体の多様性

アーバンスコップにおける特徴の一つは関わる主体が多様であることである。同様に、アーバンスコップの概念を包含する領域も多様である。このフトコロの広さが幅広い人を引きつける要因にもなっている。



▲プラットフォームとしてのアーバンスコップ

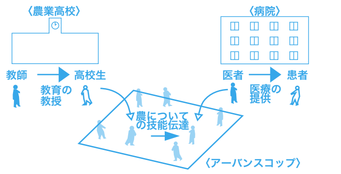
アーバンスコップは一つの場所を共有したものでありながら、多様な方向性の活動を受け止める柔軟性を合わせ持つ都市のプラットフォームである。

|  | 実施時期 | 活動主体 市民研究員 | 職員研究員 | 都市総研職員 | 農業高校生 | 地域住民 | 一般市民 | その他 | 活動内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成18年度（実践期間） | 2006.03 | ● | ● | ● |  | ● |  |  | 仙台駅東第二土地区画整理事業地内で地元町内会取材 |
|  | 2006.03 | ● | ● | ● |  |  |  |  | 報告書「杜の都に田園資源を活かす研究」発行 |
|  | 2006.04 | ● | ● | ● |  |  |  |  | 平成 18 年度「都市の農空間創出を考える研究」調査開始 |
|  | 2006.06 | ● | ● | ● | ● |  |  |  | 小牛田農林高校打ち合わせ |
|  | 2006.07 |  | ● | ● |  |  |  |  | 仙台駅東第二土地区画整理事業地内の空地利用承認 |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● |  | ● |  |  | 仙台駅東第二土地区画整理事業地内空地に対する地元説明会 |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 縄張り |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● |  |  | ● | 小牛田農林高校林視察 |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 既存砂利すき取り |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 間伐材による土留め設置 |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 土搬入 |
|  | 2006.07 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 有機肥料搬入 |
|  | 2006.08 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 耕運、種蒔き、鍬入れ式、「アーバンスコップ」命名 |
|  | 2006.08 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 花の苗を定植 |
|  | 2006.08 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 敷地内に掲示板設置 |
|  | 2006.08 | ● | ● | ● | ● | ● | ● |  | 野菜・ハーブの苗を定植 |
|  | 2006.08 | ● | ● | ● | ● |  | ● | ● | テーブル・イス製作・据え付け |
|  | 2006.09 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ミニ収穫祭 |
|  | 2006.09 | ● | ● | ● |  | ● | ● | ● | 藍の生葉染め体験 |
|  | 2006.10 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 名掛丁塩釜神社お祭りのフリマ出店 |
|  | 2006.10 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | スライド上映会開催 |
|  | 2006.11 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 収穫祭+ワークショップ開催 |
|  | 2006.11 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | せんだい都市フォーラム「仙台まちなか農園プロジェクト」開催 |
|  | 2006.12 | ● | ● | ● |  |  |  |  | 畝立て |
|  | 2006.03 | ● | ● | ● |  |  |  |  | 平成 19 年度作付け計画 |
|  | 2006.03 | ● | ● | ● |  |  |  |  | 畝立て、作付け |
|  | 2006.08~11 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 水やり、草・虫取り、いど畑会議、ランチ・ティーパーティー、テレビ・新聞取材随時 |

※活動主体のその他とは作庭家、画家、建築家、都市プランナー、イベントプロデューサー、木工技術者、研究者、元教師、農家、公務員などさまざまであった。

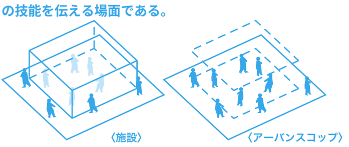
▲アーバンスコップ・プロジェクト活動年表

初年度の調査研究機関を経て、いくつかの候補のうち本プロジェクトの敷地の使用承認が得られた。その後、住民説明、町内会からの反発、説得を経てようやく実質的な作業に着手し、収穫祭までの 3 ヶ月という短い行程のなかに多くのイベントを仕掛けていった。



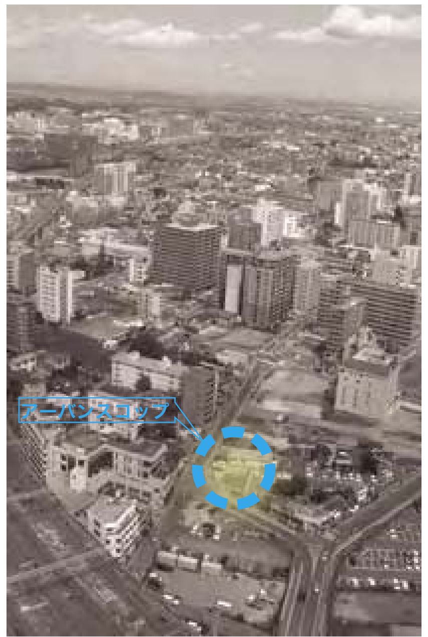
▲アーバンスコップにおける置換可能性

アーバンスコップでは日常生活における立場が置換する可能性見られる。その一つの例が、高校生が医者に農についての技能を伝える場面である。

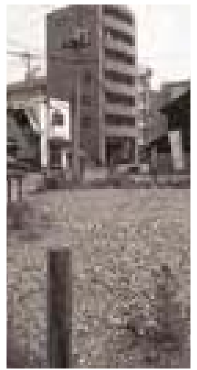


▲屋根のないアーバンスコップ

屋根がないアーバンスコップは活動の状況が地域に対して開かれ、多くの人に視覚的な参加を促した。施設系建物におけるコスト・人出がかからないことからも行政負担を軽減する手法として有効である。



△ 8/11 敷地状況俯瞰



△ 5/11 計画前敷地

△ 8/2 鍬入れ式

△ 8 月掲示板設置

△ 9/28 生葉染め

△ 8/18 椅子・テーブル設置

△ 8/11 敷地状況

△ 8/2 農業高校生による種蒔き

△ 9/11 テレビ取材

△ 8/5 花の苗植

△ 8/2 耕耘機出動

△ 11/5 敷地状況

△ 11/5 ワークショップ

△ 11/5 集合写真

△ 11/5 いど畑会議

△ 10/12 敷地状況

△ 10/12 映写会

△仙台市上空よりアーバンスコップを見る

△ 8/11 敷地状況

(ha)

|  | 宅地 | 農用地 | 森林 | 水面・河川 | 道路 | 原野・その他 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H6年度 | 11217 | 7560 | 45963 | 2794 | 4350 | 6921 | 78805 |
| H11年度 | 11655 | 7250 | 45429 | 2622 | 4762 | 7091 | 78809 |
| H12年度 | 11685 | 7200 | 45424 | 2620 | 4755 | 7307 | 78991 |
| H13年度 | 11757 | 7121 | 45309 | 2616 | 4775 | 7231 | 78809 |
| H14年度 | 11810 | 7051 | 45291 | 2613 | 4758 | 7286 | 78809 |
| H15年度 | 11887 | 6981 | 45267 | 2611 | 4813 | 7250 | 78809 |
| H16年度 | 12294 | 6871 | 45338 | 2599 | 4824 | 6883 | 78809 |

▲利用区分別土地利用状況の推移

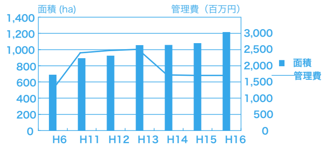
仙台市の土地利用を見ると宅地・道路の増加に対して、農用地・森林・河川・原野などの減少が目立つ。

(ha)

|  | 市街化区域 | 市街化調整区域 | 都市計画区域外 | 市域面積 |
|---|---|---|---|---|
| H6年度 | 17,489.5 | 26,594.5 | 34,721.0 | 78,805.0 |
| H11年度 | 17,862.1 | 26,221.9 | 34,725.0 | 78,809.0 |
| H12年度 | 17,862.1 | 26,221.9 | 34,725.0 | 78,809.0 |
| H13年度 | 17,861.9 | 26,222.0 | 34,725.0 | 78,808.9 |
| H14年度 | 17,861.9 | 26,222.0 | 34,725.0 | 78,808.9 |
| H15年度 | 17,862.0 | 26,222.0 | 34,725.0 | 78,809.0 |
| H16年度 | 18,000.6 | 26,283.4 | 34,525.0 | 78,809.0 |

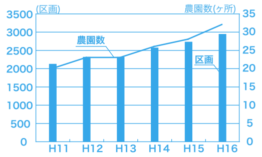
▲都市計画区域等面積の推移

都市計画的にも市街化区域が増加し、市街化調整区域、都市計画区域外が減少している。このように、都市の外延化による市域構造の変化が進展している。



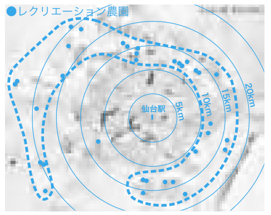
▲都市公園の推移

最近 10 年間で公園数としては 361 ヶ所の増、面積としては 525ha 増加した。しかし、それに伴い管理費も増大し、その額は 10 年で 5 億円の増である。



▲ レクリエーション農園の推移

仙台市内には都市住民が自家製野菜の生産や花を栽培する為の小規模の農園として、レクリエーション農園が整備されている。
レクリエーション公園は過去 5 年で 40% の増であるが、市街化区域内には 261 区画 (6 ヶ所 ) のみで、全体の 9% と少なく、中心市街地における都市住民に対するサービスの整備状況が低いことが伺える。



▲ レクリエーション農園の分布

仙台市における整備位置は、市街地縁辺部 ( 中心市街地より 10 ～ 20km) に分散しており、新興住宅地の開発地と合致する。これは地方都市のモータリゼーションが車に依存していることとも無関係ではない。

| 分類 | 名称 | 特徴 |
|---|---|---|
| 農業体験（児童・生徒） | 学童農園 | 農家が農作業の育成や収穫の機会を小・中学校に提供。(小学校 55 校、中学校 5 校、幼稚園等 5 校) |
| 農業体験（市民） | 米オーナー事業 | 農家と市民の契約による農作業の体験。(平成 17 年：44 組) |
| 農業体験（市民） | 野菜収穫体験 | 地元農家との共同による野菜の収穫作業の体験。 |
| 援農ボランティア | 農業サポーター | 講座修了者有志による農作業の手伝い。(サポーター登録者数 76 人) |
| 農業講座 | せんだい農学校 | 公共機関が提供する農業体験による栽培技術の習得、知識の向上の為の講座。 |

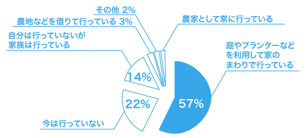
▲ 仙台市における類似した取り組み

| 対象 | 日時 | 調査対象(人) | 回収数 | 回収率 |
|---|---|---|---|---|
| 仙台市民 | 平成 17年9月 | 3000 | 765 | 25.5 |

|  |  | 実数 | % |
|---|---|---|---|
| 性別 | 男 | 343 | 45.6 |
|  | 女 | 410 | 54.4 |
|  |  | 753 | 100.0 |
| 年齢 | 10歳代 | 13 | 1.7 |
|  | 20歳代 | 83 | 11.0 |
|  | 30歳代 | 98 | 13.0 |
|  | 40歳代 | 108 | 14.3 |
|  | 50歳代 | 167 | 22.1 |
|  | 60歳代 | 154 | 20.4 |
|  | 70歳代 | 102 | 13.5 |
|  | 80歳代 | 29 | 3.8 |
|  |  | 754 | 100.0 |
| 住まい | 持ち家(一戸建て) | 476 | 63.1 |
|  | 持ち家(集合住宅) | 90 | 11.9 |
|  | 賃貸住宅(一戸建て) | 40 | 5.3 |
|  | 賃貸住宅(集合住宅) | 123 | 16.3 |
|  | 社宅・官舎・寮 | 19 | 2.5 |
|  | その他 | 6 | 0.8 |
|  |  | 754 | 100.0 |
| 世帯構成 | 一人暮らし | 85 | 11.3 |
|  | 夫婦のみ | 207 | 27.6 |
|  | 二世代(親と同居) | 83 | 11.1 |
|  | 二世代(子と同居) | 280 | 37.4 |
|  | 三世代 | 64 | 8.5 |
|  | その他 | 30 | 4.0 |
|  |  | 749 | 100.0 |

▲アンケート概要

仙台市民に対するアンケート調査からは、中心市街地に多いと思われる集合住宅居住者層や戸建て賃貸層に対して、その居住地近傍に「農」空間を整備することは有効と思われる結果が得られた。また、「農」空間は単に作物を育てる農園として使われるだけではなく、都市住民の生活の様々な場面で交流を促進させる可能性を持ったものであると考えられる。



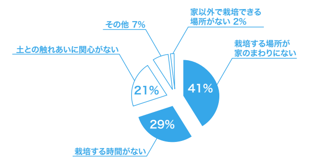
▲土との触れあいのある暮らし

(%)

|  | 戸建て |  | 集合住宅ほか |  |
|---|---|---|---|---|
|  | 持ち家 | 賃貸その他 | 持ち家 | 賃貸その他 |
| 庭やプランターなど家のまわり | 69.0 | 47.5 | 48.3 | 27.9 |
| 近所の空き地などを利用 | 0.4 | 0.0 | 0.0 | 0.7 |
| 農地などを借りて | 3.5 | 0.0 | 5.6 | 0.0 |
| 農家として常にかかわっている | 2.8 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 家族が行っている | 13.4 | 20.0 | 11.2 | 15.0 |
| その他 | 0.9 | 0.0 | 4.6 | 6.1 |
| 今は行っていない | 10.0 | 32.5 | 30.3 | 50.3 |
|  | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

▲居住形態と土との触れあい

仙台市民に対するアンケート調査からは、6 割強もの人が何らかの形で土と触れあいのある生活を送っている結果が得られた。しかし、「家の周り」で行っている人が大多数を占め、居住形態別では賃貸層の場合は 3 割弱と極端に割合が下がる。



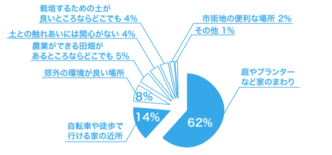
▲土と触れあわない理由

(%)

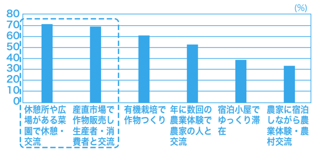
|  | 30歳以下 | 40歳代 | 50歳代 | 60歳代 | 70歳以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 庭やプランターなど家のまわり | 29.5 | 64.2 | 61.8 | 66.7 | 76.4 |
| 近所の空き地などを利用 | 0.0 | 0.0 | 0.7 | 0.7 | 0.8 |
| 農地などを借りて | 0.5 | 1.9 | 3.6 | 6.0 | 2.5 |
| 農家として常にかかわっている | 0.5 | 0.0 | 4.2 | 1.3 | 2.5 |
| 家族が行っている | 29.5 | 4.7 | 9.7 | 9.3 | 8.1 |
| その他 | 1.1 | 0.9 | 3.0 | 4.0 | 2.4 |
| 今は行っていない | 38.9 | 28.3 | 17.0 | 12.0 | 7.3 |
|  | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

▲年齢と土との触れあい

土との触れあいを行っていない理由は、場所が家の周りに無いことや、時間が無いことを理由に挙げる人が多い。
また、年齢別では若年層に比して、40 歳代以上ではいずれの年代も 6 割を超える人が土との触れあいを持つ生活を送っている。

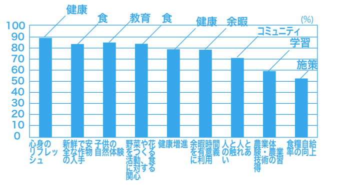


▲土と触れあう理想の場所

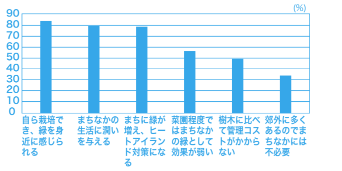


▲土との触れあいに関するスタイル

理想の場所としては家の周りとする人が多く、土との触れあいに関するスタイルとして関心層の回答からは人との交流を求める傾向が見られる。



▲土との触れあいが生活にもたらす効果



▲まちなか菜園に関する考え方

土との触れあいが生活にもたらす効果として、関心層はいずれの選択肢も高い割合で回答していることから、健康、食、教育、農、コミュニティに対して高い関連性を持つものとして認識されている。また、まちなか菜園に対する考え方として、自らが育てるということに大きな関心を抱いている層が多い。